

言語文化学科 自分の手で中国に触れ、自分の眼で確認する(松浦先生)

中国語中国文学コース

先生に聞いた!

松浦先生の研究内容

高校生のとき、日本社会の嫌な面ばかりが目につき、新中国にあこがれを持っていました。それが中国に興味を抱いたきっかけです。大学では、中国学を学び、4回生のとき、天津の南開大学に留学しました。実際に留学してみると、中国も生身の人間が生きている矛盾の多い社会であることがわかりました。しかし、せっかく留学したからには、もっと中国を深く理解できるような何かを見つけていたと考え、探していました。そのとき出会ったのが、今専門にしている伝統演劇です。伝統演劇に魅入られ、帰国後、本格的に学び始めました。中国の伝統演劇の面白いところは、「うた」「セリフ」「仕草」「立ち回り」の4つの要素の総合芸術であるところでしょう。実際の研究では、作

る教員が1人所屬しています。中国は長い歴史と広大な土地を持つており、多様性に富んでいます。そのため、中国に関する何かを勉強するには、どの分野も満遍なく学び、バランスよい知識を身につけることが非常に大切となります。

中国語中国文学コースとは

中国語中国文学コースは、語学・文学・文化の3分野を総合的に学ぶコースです。コースには現在、現代中国を専門とする教員が3人、古代中国を専門とする教員が1人所屬しています。中国は長い歴史と広大な土地を持つており、多様性に富んでいます。そのため、中国に関する何かを勉強するには、どの分野も満遍なく学び、バランスよい知識を身につけることが非常に大切となります。

中国語中国文学コース教授

松浦 恒雄先生

中国語中国文学コース教授 村田 真由さん

オススメの人

吉川英治
今や「三国志」と題された小説は多くありますが、それらに先駆けて日本に三国志を普及させたのは吉川英治でした。数多くの登場人物が生き生きと活躍する場面には迫力があり、中国で今なお名文とされるような表現は、漢文の趣きを損なわず情緒豊かに味わえます。長編ですが、どなたにも一度は読んでいただきたい作品です。

学生から見たコース

中国語中国文学コースは少人数のため、語学の授業はほぼマンツーマンで行なわれ、語学力が自然と磨かれていきます。また、授業は中国語圏からの留学生や帰國子女の学生と一緒に受けることも多く、現地の話を聞くことができたり、実際の中国語に触れることができたり、とてもいい環境で中国語を学んでいます。

卒論

- ▼史鉄生と地壇——「我与地坛」を中心として——
- ▼大阪で見られる多言語表示——中国語・観光客を中心として——

中国語中国文学コースにどこで「流行」とは?

中国語の「流行」には複数の意味があり、そのうちの一つに、中国の伝統演劇である京劇の役柄名があります。いろんな端役をこなす「その他大勢役」を演じるので、「流行」(変動する)と呼ばれます。京劇では、「流行」にも様々な約束事があり、芝居の演技は、あまり「変動する」ことなく、失われることもありませんでした。中国文化では、変わることなく、失われることもありませんでした。ただ、皮肉なことに、「流行」がよくわかっていないと勤まりません。「流行」は、主役の現れる直前一瞬、舞台全体を支配しますが、すぐ後景に退きます。この百年のうちに、京劇の主役の演技は、時代の流れにつれ、随分変わりました。しかし、そのため、随分多くのものが失われました。たまたま、皮肉なことに、「流行」の演技は、あまり「変動する」ことなく、失われることもありませんでした。中国文化では、変わることなく、失われることもありませんでした。たまたま、皮肉なことに、「流行」が反映しています。もちろん、主役の演技は、今なお人を魅するに十分です。(文・松浦先生)

先生に聞いた!

松浦先生の研究内容

私の専門は国語学、特に現代語の文法です。ごく身近な言葉の使い方が対象で、たとえば「ハ」と「ガ」のような助詞の使い方に関する問題を研究しています。

夏目漱石の『猫』が「吾が輩は猫である」と自己紹介するのに對して、ドラえもんが「ぼくドラえもんです」と「は」のない形を用いるのはなぜ?……このような文法という学問に興味を持ったとききっかけは、高校生の頃にさかのぼります。古文が好きだったこともあって、「日本語をさかのぼる」(大野晋、岩波新書、一九七四)という本を読みました。この中には、「あまぐもづき(酒杯)」と「さけ(酒)」の複合語の場合は「a」独立語の場合は「e」となるという対応があり、「a」の方が古

い形だと推定されています。こんなことがわかるのかと新鮮に感じ、言葉のシステムに興味を持ったのです。研究では、現代日本語を中心に扱っていますが、その文法体系は歴史的な過程を経てできたもので、古語と比較して考察することも必要です。

丹羽先生の研究内容

高校の国語を高度化(丹羽先生)言語文化学科

先生に聞いた!

国語国文学コースとは

国語国文学コースで学ぶことは、高校の国語を高度化したものです。高校国語は「学ぶ」「習う」ことが中心ですが、大学ではそれを「研究する」という段階へと高めます。研究においては、未知の対象に対し、自分の見解を持つこと、また、その見解に根拠を持つことが必要になります。コースで行なわれる講読や演習の授業ではその方法を体得していきます。ある作品を読むには、テキストそのものに向かうこととはもちろん、その時

代の言葉・習慣・社会状況・宗教といった背景的な知識について調べていくことが必要です。言葉を調べる場合で言えば、その言葉がどのように変遷してきたのか、実際の用例を元に後証することになります。

言葉の多彩さを追究して尽きることはあります

丹羽哲也先生 教授

国語国文学コース 教授 戸川直樹さん 3回生

国語国文学コース 3回生 (丹羽先生)

私は専門は国語学、特に現代語の文法です。ごく身近な言葉の使い方が対象で、たとえば「ハ」と「ガ」のような助詞の使い方に関する問題を研究しています。

卒論

- ▼江戸川乱歩文学における「胎内願望」について
- ▼形容詞接尾辞「み」について
- ▼百人一首における藤原定家の秀歌意識——貫之歌「人はいさ」からの考察